日蓮大聖人御書全集

上野尼御前御返事（うえのあまごぜんごへんじ）

（霊山再会の事（りょうぜんさいかいのこと））

新版
1920
〜
1921

上野尼御前御返事（霊山再会の事）

弘安4年('81) 1月13日　60歳　上野尼

聖人ひとつつひさげ十か・十字百・飴ひとおけ二升か・柑子ひとこ・串柿十くし、ならびにくり給び候い了わんぬ。春のはじめ、御喜び花のごとくひらけ、月のごとくみたせ給うべきよし、うけたまわり了わんぬ。

そもそも、故五ろうどのの御事こそおもいいでられて候え。ちりし花もさかんとす、かれしくさもねぐみぬ、故五郎殿もいかでかかえらせ給わざるべき。あわれ、無常の花と

草様　人丸にはあらずとも花のもとともはなくさとのようならば、

許離　駒許去　れじ、いはうるこまにあらずとも草のもとをばよもさらじ。

敵説謂　経文には、子をばかたきととかれて候。それもゆわれ

鳥食獣　候か。梟と申すとりは母をくらう。破鏡と申すけだもの

安禄害　は父をがいす。あんろく山と申せし人は史思明と申す子に

兵父殺　ころされぬ。義朝と申せしつわものは為義と申すちちを

敵殺　ころす。子はかたきと申す経文、ゆわれて候。

　また、子は財と申す経文あり。妙荘厳王は、一期の後、

無間大城と申す地獄へ堕ちさせ給うべかりしが、浄蔵と

申せし太子にすくわれて、大地獄の苦をまぬかれさせ給うのみならず、娑羅樹王仏と申す仏となら せ給う。青提女と申せし女人は、慳貪のとがによって餓鬼道に堕ちて候いしが、目連と申す子にたすけられて、餓鬼道を出で候いぬ。されば、子を財と申す経文たがうことなし。

故五郎殿は、とし十六歳。心ね、みめかたち、人にすぐれて候いし上、男ののうそなわりて、万人にほめられ候いしのみならず、おやの心に随うこと、水のうつわものにしたがい、かげの身にしたがうがごとし。いえにてははしら

とたのみ(頼)、道(みち)にてはつえ(杖)とおもいき(思)。はこ(箱)のたからもこ(財)の子のため、つかう所従(しょじゅう)使もこれがため、「我(われ)しなば、になわれ(担)てのぼへゆきなん。野辺行(のべゆき)のちのあと(後跡)、おもいおくこと(思置)なし」とふかくおぼしめしたりしに(深思)、いやなくさきにたちぬれば(先立)、

「いかんにや、いかんにや。ゆめかまぼろしか(夢幻)。さめなん(醒)、さめなん」とおもえどもさめずして(思醒)、としもまたかえりぬ(年返)。いつとまつべしともおぼえず(待覚)。ゆきあうべきところだにも(行合所)申しおき(申置)たらば、はねなくとも天へものぼりなん(羽天上)、ふねなくともももろこしへもわたりなん(唐土渡)。大地のそこにありときか(大地底聞)

ば、いかでか地をもほらざるべきとおぼしめすらん。

やすやすとあわせ給うべきこと候。釈迦仏を御使いとして、りょうぜん浄土へまいりあわせ給え。「もし法を聞くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」と申して、大地はささばはずるとも、日月は地に堕ち給うとも、しおはみちひぬ世はありとも、花はなつにならずとも、南無妙法蓮華経と申す女人の、おもう子にあわずということはなしととかれて候ぞ。いそぎいそぎつとめさせ給え、つとめさせ給え。恐々謹言。

正月十三日（しょうがつじゅうさんにち）

上野尼御前御返事（うえののあまごぜんごへんじ）

日蓮（にちれん）　花押（かおう）